Ⅳ　佐倉ホワイエ

1　現況

概要

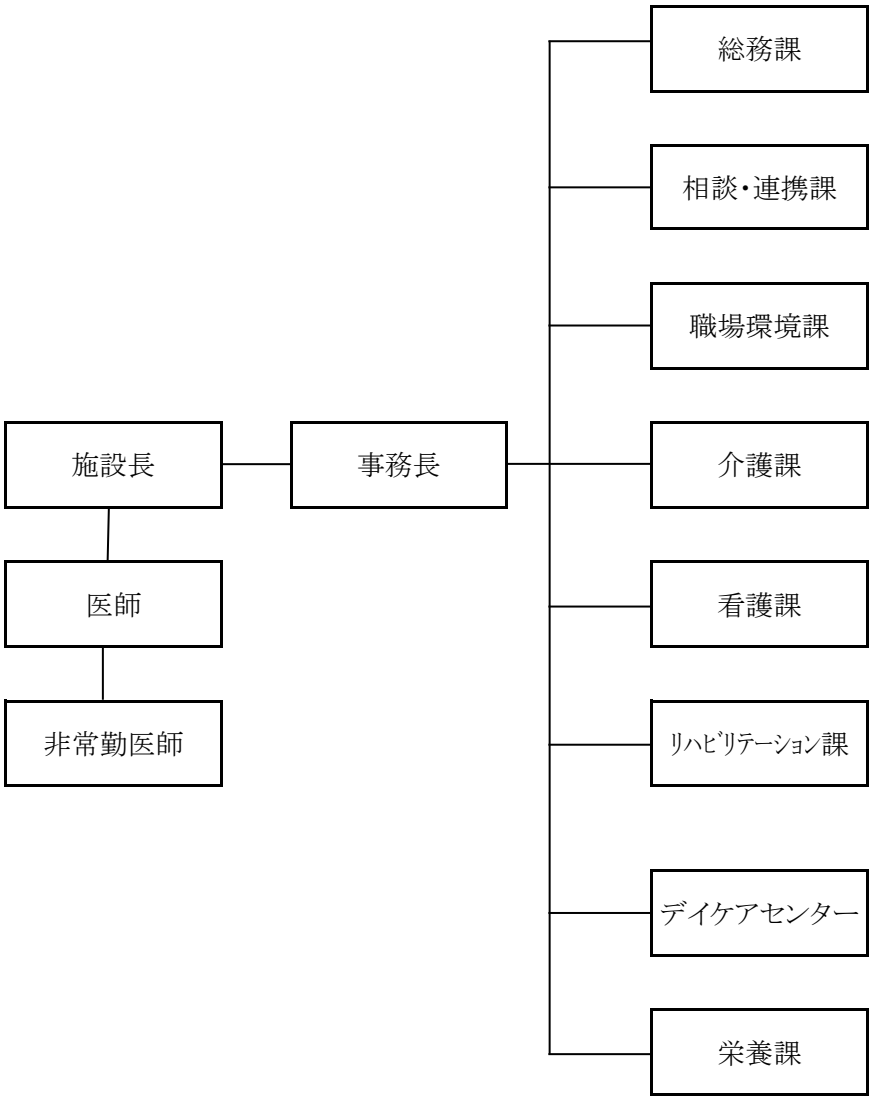
所 在 地　〒285-0025　千葉県佐倉市鏑木町336番地
TEL.043-484-4680

施 設 長　遠山正博

入所定員　80人

開 設 年　平成2年

組織図



各種認定資格

●医師

2021年3月現在

氏名	認定機関	認定資格
遠　山　正　博	日本老年医学会	老人保健施設管理医師総合診療研修会修了

●総務課

氏名	認定機関	認定資格
香　取　文　男	厚生労働省	社会福祉主事
	日本慢性期医療協会	リスクマネジメント研修修了
島　　雅　之	日本医療教育財団	ケアクラーク
	日本産業廃棄物処理振興センター	特別管理産業廃棄物管理責任者

●相談・連携課

氏名	認定機関	認定資格
石　田　康　之	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
岡　田　大　輔	厚生労働省	社会福祉士
	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員

●介護課

氏名	認定機関	認定資格
丸　山　　恵	厚生労働省	社会福祉士
	中央職業能力開発協会	介護アテンドサービス士
	日本認知症ケア学会	認知症ケア専門士
関　口　翔　平	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
	日本介護福祉士協会	介護福祉士実習指導者
	日本認知症ケア学会	認知症ケア専門士
	東京商工会議所	福祉住環境コーディネーター2級
藤　江　　誠	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
	東京商工会議所	福祉住環境コーディネーター2級
保　谷　浩　一	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
	千葉の介護が輝く会	介護職対象認知症専門職研修初級
坪　井　真　司	厚生労働省	社会福祉主事
児　嶋　禎　一	厚生労働省	社会福祉主事

●看護課

氏名	認定機関	認定資格
坂　本　悦　子	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
梶　内　清　治	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
宮　内　美　子	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員

●リハビリテーション課

氏名	認定機関	認定資格
金　子　正　樹	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
佐　田　龍　吾	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了
平　澤　美枝子	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了
田　代　　舞	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了
森　本　未　来	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了
依　田　香　保	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了

●栄養課

氏名	認定機関	認定資格
細　島　ひさゑ	厚生労働省	食品衛生管理士

●デイケアセンター

氏名	認定機関	認定資格
黒　川　修　一	全国老人保健施設協会	生活行為向上リハビリテーション研修会修了

●厚生園ケアマネジメントセンター

氏名	認定機関	認定資格
高　橋　隆　彦	厚生労働省	社会福祉士
		介護福祉士
	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
内　藤　順　江	厚生労働省	介護福祉士
	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員
成　毛　育　子	厚生労働省	介護福祉士
	千葉県介護支援専門員協議会	介護支援専門員

施設利用状況

			2018年度	2019年度	2020年度
1日平均入所者数(人)	介護老人保健施設	要介護1	4.8	3.5	3.0
		要介護2	14.1	17.1	15.9
		要介護3	15.6	14.3	13.0
		要介護4	28.3	26.3	27.0
		要介護5	14.0	16.3	17.1
		計	76.8	77.5	76.2
	短期入所療養介護入所	要介護1	0.2	0.2	0.2
		要介護2	0.2	0.2	0.1
		要介護3	0.1	0.3	0.4
		要介護4	0.1	0.2	0.3
		要介護5	0.3	0.1	0.2
		計	0.9	1.0	1.1
	合計		77.8	78.5	77.3
1日平均通所者数(人)	通所リハビリテーション	要介護1	7.7	7.2	5.9
		要介護2	9.0	7.5	7.9
		要介護3	5.5	7.0	5.8
		要介護4	2.6	3.7	3.9
		要介護5	1.1	1.5	0.5
		計	26.0	26.9	24.1
	予防通所リハビリテーション	要支援1	2.4	2.3	1.2
		要支援2	9.3	6.6	4.9
		計	11.6	8.9	6.1
	合計		37.6	35.8	30.2
平均入所利用率(%)	介護老人保健施設		96.2	96.8	95.2
	短期入所療養介護入所		1.2	0.9	1.4
	合計		97.4	97.7	96.6
平均通所利用率(%)	通所リハビリテーション		51.9	54.1	48.1
	予防通所リハビリテーション		23.3	20.4	6.2
	合計		75.2	74.5	54.3
平均在所日数(日)	介護老人保健施設		329.6	459.1	632.4
	短期入所療養介護入所		7.5	5.1	11.8
	合計		337.1	464.2	644.2
平均要介護度	介護老人保健施設		3.4	3.4	3.5
	短期入所療養介護入所		3.1	2.5	3.0
	合計		3.4	3.4	3.5
在宅復帰率(%)			18.8	24.2	11.7
利用者100人あたりの従業員数(人)	医師		1.1	1.1	1.1
	看護師・准看護師・介護職員		48.2	44.2	47.6
	支援相談員・PT・OT・ST		11.5	10.2	10.1
	その他		7.8	10.7	7.1
	合計		68.6	66.2	65.9

2 業務実績

総務課

文責／香取文男

スタッフ(2021.3現在)

事務員：常勤2名、非常勤2名
香取文男(課長)、島　雅之(主任心得)、
杉山恵美子(非常勤)、小川雪江(非常勤)

活動状況

1.廃棄物低減
施設全体から生じる廃棄物を分別、計量、記録し、量の低減化に努めた。定期的に成果を可視化し、職員へ周知することで意識向上を図った。残食量を計量(1,531kg)し、シンクピアを用いて水と微量の二酸化炭素に分解、生ごみは皆無とした。残食量の経日推移を可視化し、献立の改善に活かすとともに利用者の健康状況モニターの一助とした。

2.節電、節水
本年度における施設の総消費電は224,676Kwhであった。長期的視点から設備を更新し、更なる節減を目指したい。

今後の目標

今後もエネルギー節減に努めたい。さらに食材の有効活用とともに環境保全に注力する。

相談・連携課

文責／石田康之

スタッフ(2021.3現在)

支援相談員：常勤2名
石田康之(係長)、岡田大輔(主任)

活動状況

1.入所利用者数の月別変動
入所実利用者は108人、入所延利用者数 27,797人、1日平均76.2人であった。入所利用者数は新型コロナウイルス感染症流行の影響を受け、昨年度の158人に比べ大きく減少した。月別変動をみると、2020年5～6月は第1回緊急事態宣言の影響により利用者数が減少した。7月以降の利用率は改善していたが、12月～2021年3月は新型コロナウイルス感染者数の再増加や第2回緊急事態宣言の影響を受け利用者数が減少した。

2.入所利用者の年齢、要介護度、入所経路
入所利用者108人を入所時年齢別にみると、80歳代は48人(44.4%)、90歳代は28人(25.9%)、100歳以上は1人(0.1%)であった。昨年度は、それぞれ47.5%、23.4%、0.1%であったので大きな変化はなかった。要介護度別利用者数は、要介護度5が23人(21.3%)、要介護度4が40人(37.0%)、要介護度3が20人(18.5%)であった。昨年度はそれぞれ14.6%、30.4%、24.7%であり、今年度は要介護度4、5の割合が増加したことがわかった。入所経路についてみると、病院からの入所者は70人(64.8%)であり、昨年度の84人(53.2%)と比較すると割合は大きく増加した。居宅系(居宅、グループホーム、有料老人ホーム、サービス付き高齢者住宅、短期入所)からは31人(28.7%)であり、昨年度の59人(37.3%)より減少した。老健からは7人(6.5%)であり、昨年度の15人(9.5%)より減少した。

今後の目標

近隣病院との関係を維持しながら、居宅系からの入所も積極的に受け入れたい。また計画的に入退所を行い、稼働率向上を目指したい。

職場環境課

文責／平澤美枝子

スタッフ(2021.3現在)

なし

活動状況

本年度は人材育成に重点を置き、新たな研修として初級コース、中級コース、管理職コースの3つの研修を実施、その後アンケートを行った。初級コースでは「大変よい」、「よい」が大多数であった。中級コースでも「よい」が多数であったが、業務改善の視点では難易度が高いという意見があった。管理職コースも「よい」が多数であった。アンケートの結果から全般的に研修内容は妥当

性があると思われるが、全コース共通で時期が遅い、研修時間が短いという意見が多かった。

今後の目標

研修時間を確保する必要がある。研修制度を充実させ、職員の技術、満足度向上を図りたい。

介護課

文責／丸山　恵

スタッフ(2021.3現在)

介護職員：常勤22名
丸山　恵(課長)、関口翔平(係長)、藤江　誠(主任)、
保谷浩一(副主任)、坪井真司(副主任)、
児嶋禎一(副主任)、鈴木厚祐(副主任)、
中山陽介(リーダー)、佐久間絢香(リーダー)、
笹川由香、高橋麻莉奈、知念亮子、藤野優由貴、
木村由美子、井上　学、小野寺陽子、堀江　泉、
西條典子、泉澤亜由美、二葉知子、菅原あやか、
白井元輝
介護職員：非常勤10名
酒井貴則、鈴木恵子、岡部真理子、片岡公子、
池田裕子、小出芳枝、石渡俊枝、大久保すみ子、
中川　恵、畠山裕子

活動内容

1.危険発生予防の試み
眠りスキャンを設置し、データを測定できた17人について効果を検証した。適切に訴えができない方の体動を早期に察知し、動きを観察することで体動の目的を把握し、行動パターンを知ることができた。把握した情報を共有し、先読みしたケアを実施することで、自己動作による転倒などの危険回避につなげることができた。また今年度は一時的な体調不良者の他、終末期の利用者に対しての使用が増えた。呼吸状態や心拍等の観察を行い、状態の変化を検知した際はすぐに看護師が対応し、病院へつなげることができた。これまでの測定結果から、導入時は転倒予防目的の利用が大半であったが、現在は検知にタイムラグがあることから体調の変化を先読みし、速やかに医療的ケアが行えるような使用目的に変わりつつある。

2.介護職員の業務負担軽減の試み
排便の漏れによる介護負担の軽減を目標に、医療チーム・栄養委員会・排泄検討委員会と連携しながら、個々の利用者の服薬状況、漏れの状況、食事内容について精査し、排便の性状や排便時間のコントロールや、漏れの予防を試みた。またオムツの廃棄量を計測し、継続して経時的に振り返り、効果の有無を可視化するように試みた。2016年に導入した眠りスキャンは6台に増え、更なる介護職員の業務負担軽減に繋がるよう使用場面を検討している。

3.感染症予防の取り組み
新型コロナウイルス感染予防の取り組みとして、職員の体調確認や消毒・手洗い、マスクの着用を徹底した。また利用者への感染予防としては、各フロアの消毒作業、食堂席のアクリル板設置、利用者の食事前の手指消毒を実施した。さらに利用者同士の交流を可能な限り縮小する目的で、入浴はフロアごとに実施し、職員もフロア単位での業務分担とした。

今後の目標

1.重度の利用者が入所してくることを想定し、使用対象を吟味する。体調の変化を速やかに察知し、医療との連携を図ることを目標とする。睡眠状態と体動の理由を読み取り、日中のケアの充足を図りたい。
2.今後も排泄ケアについては検討を重ね、各種委員会、オムツメーカーとの連携を図り、オムツの選定や漏れの予防を図りたい。介護ロボットについても新しいものが導入できないか積極的に検討し、介護業務の負担軽減を目指す。
3.引き続き施設内に感染症が入らないよう予防に努めると同時に、利用者の満足度を少しでも高められるよう、施設内の活動を充実させる。

看護課

文責／坂本悦子

スタッフ(2021.3現在)

看護師：常勤5名、非常勤2名
坂本悦子(師長)、宮内美子(主任)、篠田望美、
小林喜代子、坂尾一恵、落合より子(非常勤)、
神林祐子(非常勤)
准看護師：常勤7名
梶内清治(主任)、長竹靜子(主任)、
小川ひろ子(副主任)、長谷川敏子、海老澤美子、
長谷川順子、寺下フサ子

活動状況

1.入所利用者の主疾患の解析

入所利用者108名の入所時主疾患(診療情報提供書による)を解析した。最も多かったのは例年通り中枢神経系疾患で、次いで運動器系疾患であった。この2疾患が全体の71.3%を占め、昨年度の68.5%より増加した。日周リズム回帰プログラムに参加することにより、運動機能障害、認知機能の改善が期待される。循環器系は8.3%と昨年度の13.1%より5.2%減少した。糖尿病は3.7%と昨年度の2.3%より増加した。入浴時には血行状態、浮腫の状況、感染予防に注目した観察が求められる。病院に入院退所した21名について、入所時と退所時の主疾患を検討すると、中枢神経系と運動器系は減少したが、循環器系、消化器系、泌尿器系、呼吸器系、悪性腫瘍が増加した。入所中に新たな疾患を得た者は17名であった。循環器系2名は103歳と超高齢であった。悪性腫瘍1名は、入所中に口腔底癌を発症した。専門医を受診、本人、家族の意向のもと経過観察を行った。日々の関わりのなかで、体調の変化に気づき対応していくことが重要と考える。今後も他職種との連携を密に行い、体調管理に努めていく。

2.入所利用者の入所時持参処方薬数平均値と入所後臨時処方薬数平均値の月別分布

入所利用者108名について、入所利用開始時点における持参処方薬数の平均値と入所後の臨時処方薬数の平均値の月別分布を解析した。両値の月別推移において相関は認められず、月別入所持参薬数は5.13～5.43処方薬数で維持された。臨時処方薬数の月別平均は2.27処方薬数であったが、4月、5月、7月、8月は2.58～2.85と処方薬数の増加がみられた。季節の変化、気温の変化にも対応した体調管理が必要であることが示唆された。薬剤費でみると、2018年度は4,193,008円、2019年度は4,179,543円、2020年度は3,847,813円と低減した。理由のひとつに入所利用者月平均の一日人数が昨年度より減ったことが挙げられる。入所利用者の日周リズム回帰を図り、治未病の成果を挙げたい。

3.皮膚疾患への対応

入所中の褥創発症者は10名、持ち込み者はいなかった。体位交換、姿勢の保持、離床時間の検討等、多職種の協力により全員治癒した。白癬症の発症は6名、6～8月に集中していた。帯状疱疹1名、蜂窩織炎1名は治癒。湿疹は19名、治癒するのに経過を要した。

今後の目標

感染予防に努め、安全・安心、信頼される看護を提供する。その人が持っている力を最大限引き出せるよう、専門知識に基づき支援する。

リハビリテーション課

文責／金子正樹、平澤美枝子

スタッフ(2021.3現在)

理学療法士：常勤5名、非常勤2名
金子正樹(理学療法科主任)、佐田龍吾(副主任)、
依田香保、萩野匡史、菊池嘉志、秋山大輔(非常勤)、
長谷川千浩(非常勤)
言語聴覚士：常勤3名
平澤美枝子(言語聴覚科係長)、田代　舞(リーダー)、
森本未来
助手：常勤1名、非常勤1名
千葉哲也、松尾佐津代(非常勤)

活動状況

2021年度の介護保険法改正では、科学的介護の推進が求められている。当施設においても独自に様々なデータを収集して解析してきた。災害や感染症に加え、利用者の重度化や多様性への対応が必要となっている。介護老人保健施設が地域包括支援システムの中でどのように動くべきか、考えることが必要とされている。

1.機能的動作尺度(Functional Motor Scale：FMS値)計測による生活能力改善支援の実績

2020年度の全入所利用者のうち、入所時と入所3ヶ月後にFMS値及びHDS-R値をともに計測できた108人と91人について、移動形態をティルト型車椅子群、車椅子介助群、車椅子自走群、自動ブレーキ型車椅子群、ウォーカー歩行群、杖・フリーハンド群の6群に分け、それぞれのFMS値とHDS-R値の点数と移動形態について解析した。

入所時のティルト型車椅子群6人のFMS値の平均点は2.5点(最低値0点、最高値　6点)、HDS-R値の平均点は2.9点(最低値0.1点、最高値5点)、車椅子介助群53人のFMS値の平均点は11.7点(最低値0点、最高値36点)、HDS-R値の平均点は7.8点(最低値0点、最高値25点)、車椅子自走群34人のFMS値の平均点は28.0点(最低値1点、最高値48点)、HDS-R値の平均点は17.4点(最低値0.1点、最高値29点)、自動ブレーキ型車椅子群4人のFMS値の平均点は29.8点(最低値24点、最高値39点)、HDS-R値の平均点は12.0点(最低値7点、最高値16点)、ウォーカー歩行群9人のFMS値の平均点は36.6点(最低値27点、最高値43点)、HDS-R値の

平均点は18.1点(最低値11点、最高値29点)、杖・フリーハンド群2人のFMS値の平均点は43.5　点(最低値43点、最高値44点)、HDS-R値の平均点は13.5点(最低値9点、最高値18点)であった(図1)(表1)。

入所3か月後のティルト型車椅子群8人のFMS値の平均点は3点(最低値0点、最高値14点)、HDS-Rの平均点は4.3点(最低値0.1点、最高値18点)、車椅子介助群32人のFMS値の平均点は　9.8点(最低値0点、最高値31点)、HDS-Rの平均点は7.9点(最低値0点、最高値27点)、車椅子自走群37人のFMS値の平均点は28.8点(最低値2点、最高値48点)、HDS-R値の平均点は17.1点(最低値0点、最高値30点)、自動ブレーキ型車椅子群3人のFMS値の平均点は35.3点(最低値26点、最高値46点)、HDS-R値の平均点は9.7点(最低値8点、最高値12点)、ウォーカー歩行群8人のFMS値の平均点は42.5点(最低値40点、最高値45点)、HDS-R値の平均点は17.4点(最低値11点、最高値28点)、杖・フリーハンド群3人のFMS値の平均点は43.3点(最低値41点、最高値47点)、HDS-R値の平均点は14.7点(最低値4点、最高値24点)であった(図2)(表1)。

FMS値とHDS-R値を5年以上に渡り計測していったところ、点数と移動形態に特長があるのではないかと考え、散布図と表を使用して検証した。結果としては、ティルト型車椅子群はFMS値とHDS-R値がともに3点前後で最も低値だった。車椅子介助群はFMS値が10点前後、HDS-R値が8点前後で、座位はとれるが自走は困難な方が多かった。車椅子自走群はFMS値が28点前後、HDS-R値が17点前後で、その点数域が車椅子介助と自走との境目という印象であった。自動ブレーキ型車椅子群はFMS値が30点前後、HDS-R値が10点前後で、半ば動けるが車椅子やコールの管理等はできない方が多かった。ウォーカー歩行群はFMS値が38点前後、HDS-R値が18点前後で、ある程度物品やコールの管理は可能であり、持久力やバランス能力は高いが、フリーハンドでは安定性や持久性が不足している方が多かった。杖・フリーハンド群はFMS値が43点以上、HDS-R値が14点前後で、認知機能がある程度低値でも、運動機能が高ければ物品を使用しなくとも移動形態は補えていた。入所3か月後においては、車椅子介助群と車椅子自走群の割合が逆転し、ウォーカー歩行群はFMSの点数が平均6点ほど改善していた。これは、入所3か月以内に集中してリハビリテーションを行い、自分で行えることを増やした結果と考える。また車椅子自走群の方がFMS値及びHDS-R値も良好なことから、入院中や介護予防に至るタイミング、もしくはそれより以前から、車椅子管理や駆動練習を経験しておくことが重要と思われた。施設内は広く、集団生活の場になるため、環境的に自宅よりも転倒リスクが高くなると思われる。今回の移動形態は、施設生活で実際に行っている移動形態である。実際の能力はウォーカー歩行レベルの人であれば、短距離の伝い歩きや杖歩行等が可能な方も多い。施設内では、できる能力より1段階落とした移動形態を選択し、安全と自立した移動を両立する必要がある。施設入所の前段階において、そういったことを考慮した移動形態の練習を行っておくことは有用と考えられる。

上記に加え、高次脳機能障害やパーキンソン病等の難病、内部疾患等も移動形態選定の考慮に入れなければならないので一概には言えないが、施設での移動形態の決定や変更を行う時の指標として活用できるよう、今後も調査していきたい(図1)(図2)(表1)。

2.新型コロナウイルス感染予防のため、通所を自粛していた利用者への対応

昨年度は移動能力(Timed Up & Go :TUG値)計測による運動能力改善支援について研究を行っていた。しかし、今年度初頭より新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって通所利用者の欠席が増加したため、過去との比較が困難となった。2020年4月7日から5月25日の緊急事態宣言の期間は、自粛により42名の利用者が利用休止となった。リハビリテーション課の対応としては、理学療法士及び言語聴覚士が休止中の利用者に電話で連絡を取り、現在の状況を確認した。自宅でのリハビリテーションを希望する利用者に関しては、自分自身もしくは家族とできるプログラムを作成して郵送した。担当ケアマネジャーにも状況報告を行った。その後も定期的に利用者と連絡を取り、自宅での状況やプログラムについて聞き取りを行った。利用者本人、家族をはじめケアマネジャーからも感謝の声が聞かれた。2021年3月1日現在、休止中であった利用者42名中31名が利用を再開している。再開した利用者においては大きな能力低下は見られなかった。再開できなかった利用者の内訳としては、そのまま終了となった利用者が7名、休止継続中の利用者が4名となっている。今回のように人との接触を避けるための自粛では、直接的な介入が難しい状態であったが、電話での状況確認を行いながら個別に必要なリハビリプログラムを提案し、自宅でのリハビリ継続を促すことで利用者の機能低下を防ぐことができたと考える。今後もこの経験を活かしていきたい。

3.経鼻経管、胃瘻栄養から経口摂取移行の試み

2020年度経管栄養で入所した利用者は2人。経口移行取組対象者は2019年に入所した利用者3人。経口摂取へ移行できた利用者は2人いたが、1人は約2か月後に

誤嚥性肺炎を発症。多様で難しい判断が必要であった。入所利用者の入所時症状が重度化する中、食事は高齢者の楽しみであり、生活の意欲に繋がる。経管栄養実施者の経口摂取移行の可能性の見極め、多職種での関わりを継続し取り組みたい。

4.歯科衛生士の介入について

2019年度に引き続き、歯科衛生士より介護職員へ、入所利用者の口腔ケアについての指導を行った。歯科衛生士は介助が必要な部分の伝達を行い、介護職員は具体的な介助方法についての質問をした。約1か月間は新型コロナウイルス感染症の流行により介入を保留としたが、流行長期化の見込みと介入中止による不利益を考慮し再開することとした。利用者延べ22人に対し、介護職員12人(重複あり)が指導を受けた。2019年までは常勤職員のみを対象としていたが、今年度は非常勤職員も指導を受けた。口腔ケアは誤嚥性肺炎発症を防ぐ効果があり、利用者自身の改善だけではなく、介助者の口腔ケア技術向上も必要である。対応は利用者毎に異なるため、今後も継続し口腔ケア技術の向上を図りたい。

5.摂食嚥下機能低下への対応

当施設利用者の高齢化および重度化は、入所時また入所後様々な程度の摂食嚥下機能障害をきたす例の増加をもたらしている。また入所前に誤嚥性肺炎の既往歴をもつ利用者も増加していることから、肺炎再発予防や低栄養への対応強化が求められる。すべての利用者に対し入所開始時点で各職種の職員がそれぞれ状態を評価し、職種間で連携調整の上、適切な食形態および食介助法を選定、実施している。今後は機能評価法訓練、嚥下調整食、治療薬の導入とあわせ発展させたい。

今後の目標

今後も利用者が自ら望む生活ができるよう、より効果のある生活能力改善支援を提供したい。また全国介護老人保健施設大会や全国デイ・ケア研究大会での発表、地域貢献としては中央公民館と共催の健康増進教室、地域包括支援センターとの共催の介護予防講座等を実施し、見分をより広めることができ我々が望む支援に活かしたい。

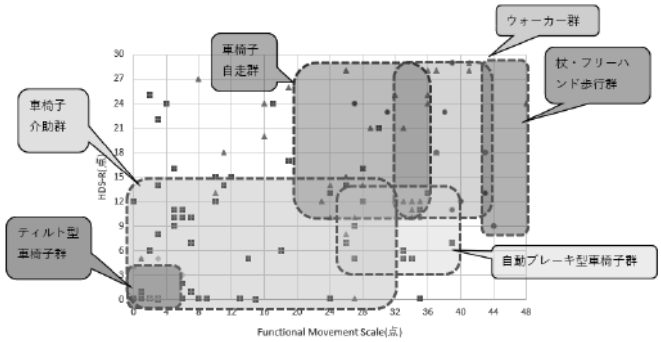


図1

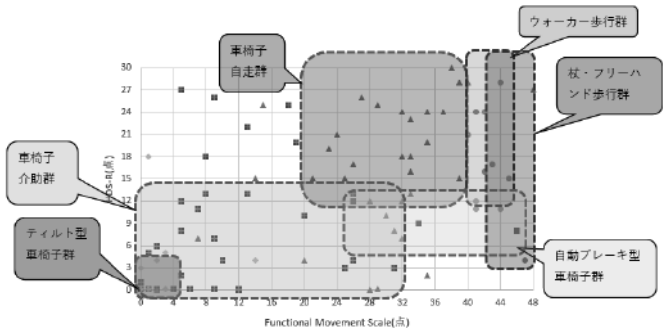


図2

表1

入所時:計108人	FMS値	HDS-R値	入所3か月後:計91人	FMS値	HDS-R値
ティルト型車椅子群:6人(5.6%)	2.5(0-6)	2.9(0.1-5)	ティルト型車椅子群:8人(8.8%)	3(0-14)	4.3(0.1-18)
車椅子介助群:53人(49.1%)	11.7(0-36)	7.8(0-25)	車椅子介助群:32人(35.2%)	9.8(0-31)	7.9(0-27)
車椅子自走群:34人(31.5%)	28.0(1-48)	17.4(0.1-29)	車椅子自走群:37人(40.7%)	28.8(2-48)	17.1(0-30)
自動ブレーキ型車椅子群:4人(3.7%)	29.8(24-39)	12.0(7-16)	自動ブレーキ型車椅子群:3人(3.3%)	35.3(26-46)	9.7(8-12)
ウォーカー歩行群:9人(8.3%)	36.6(27-43)	18.1(11-29)	ウォーカー歩行群:8人(8.8%)	42.5(40-45)	17.4(11-28)
杖・フリーハンド歩行群:2人(1.9%)	43.5(43-44)	13.5(9-18)	杖・フリーハンド歩行群:3人(3.3%)	43.3(41-47)	14.7(4-24)

デイケアセンター

文責／黒川修一

スタッフ(2021.3現在)

理学療法士：常勤1名
黒川修一(センター長)
介護職員：常勤6名、非常勤1名
前田美香(副主任心得)、山口真弓(リーダー)、
関口千恵美、中山彩夏、平田朱里、高木晴美、
古川　武(非常勤)

活動状況

1.通所利用者数の月別変動

通所実利用者数は156人、通所延利用者数は9,319人、1日平均30.3人であった。延利用者数は昨年度の11,486人より減少した。昨年の2月より新型コロナウイルス感染症の流行による減少があり、4月の緊急事態宣言を経て5月には1日平均22.9人と過去最低の人数を更新した。その後、新型コロナウイルス感染症に対する利用者や周りの警戒心が徐々に緩解したことで、6月から徐々に利用者数や新規契約数は増加した。2021年1月、再度、緊急事態宣言があったが、1回目の時より利用者減少は見られなかった。通所中止利用者42人中、死亡により中止した5人を除く37人を中止理由別にみると、卒業が1人(2.7%)、サービス移行者9人(24.3%)で、昨年度の12人(42.9%)より減少した。利用継続不能となった通所利用者は27人(73.0%)で、昨年度の16人(57.1%)より増加した。

2.リハビリテーションマネジメント加算Ⅲ適応の利用者への影響

リハマネⅢの算定要件には、本人・家族はもちろん医師をはじめケアマネジャーやリハビリテーション専門職などが参加するリハビリテーション会議が義務付けられている。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、外部からの参加は中止せざるを得ない状況であった。一度状況が良くなり、7月に家族・ケアマネジャーを集めて会議を開催したこともあったが、新型コロナウイルス感染症患者の増加により、再度、外部からの参加は中止せざるを得ない状況となった。開催の都度、家族には連絡帳を通して、ケアマネジャーにはFAXによる回答にて利用者の状況確認を行った。必要性があれば、感染予防に留意しながら訪問も行った。新型コロナウイルス感染症が収束次第、外部からの参加を随時再開し、リハビリテーション会議の有用性を検証する。

今後の目標

リハビリテーションの有用性を求めるため、LIFEへの情報提供を行い、適切なケアを提供する。

3 委員会活動

運営委員会

文責／香取文男

◎目的

施設全体の運営が円滑に行えるよう各課の代表により検討する。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：遠山正博(施設長)
総務課：香取文男、島　雅之
相談・連携課：石田康之
介護課：丸山　恵、関口翔平
看護課：坂本悦子
リハビリテーション課：平澤美枝子
デイケアセンター：黒川修一
栄養課：細島ひさゑ

◎開催日

毎週火曜日、午後3時

◎活動状況

施設長を中心とした各職種代表により構成。施設運営の根幹となる事項を検討し、業務成績の向上を図った。今後も継続し、成績向上を図る。

入退所検討会議

文責／石田康之

◎目的

入退所決定の透明性、公平性を確保し、より適切な介護サービスの提供を行う。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：遠山正博(施設長)
総務課：香取文男
相談・連携課：石田康之、岡田大輔
介護課：関口翔平
看護課：坂本悦子
リハビリテーション課：金子正樹、田代　舞
デイケアセンター：黒川修一
栄養課：細島ひさゑ

◎開催日

毎週火曜日、午後2時

◎活動状況

病院からの利用者は70人、居宅系からの利用者は31人であった。新型コロナウイルス感染症流行による影響を受け、全体的に利用者数が減少した。入所利用者については、今後の方向性も合わせて議論し、在宅復帰を目標に情報を共有した。今後も継続し、成績向上を図る。

介護支援専門委員会

文責／岡田大輔

◎目的

入所期間が長期化している利用者の退所への働きかけと、適切なケアに向けたプランの作成を行う。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：岡田大輔(相談・連携課)
介護課：関口翔平、藤江　誠
看護課：坂本悦子、梶内清治、宮内美子
リハビリテーション課：金子正樹

◎開催日

随時

◎活動状況

長期入所利用者が増えているため、退所を検討した。重度化している利用者を中心に、稼働率を考慮しながら新規利用者との入れ替えを調整するよう努めた。今後も長期在所者へ適切に働きかけ、在宅復帰率向上に繋げる。

栄養委員会

文責／細島ひさゑ

◎目的

全ての利用者を対象とし、個々に見合った食事の提供と栄養管理の充実を目指す。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：細島ひさゑ(栄養課)
総務課：香取文男
相談・連携課：岡田大輔
介護課：丸山　恵、鈴木厚祐、前田美香、中山陽介
看護課：宮内美子
リハビリテーション課：平澤美枝子、金子正樹、田代　舞

◎開催日

第1水曜日、午後1時

◎活動状況

健康管理の一環として、個々の利用者の栄養管理について対策を講じ、栄養状態の改善、疾病の予防、QOL向上に努めた。喫食率を上げる取組みで、食具を見直し改めた。嚥下障害への対応をより密に行った。高齢者の食を豊かにする取組みは好評を得た。食品衛生管理について、話し合い、食中毒および感染性胃腸炎の予防に努めたところ、皆無であった。感染性患者発症時の食事提供手順について、迅速に対応できるよう改めた。今後も喫食率の更なる向上と褥瘡予防に寄与する。

防災委員会

文責／島　雅之

◎目的

災害時における防災対策や定期的な避難訓練の実施およびマニュアルの作成、見直しを行う。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：島　雅之(総務課)
総務課：香取文男
介護課：知念亮子
看護課：長谷川順子
デイケアセンター：黒川修一

◎開催日

第4木曜日、午後0時30分

◎活動状況

防災訓練は、密を避けるため、参加回数の少ない職員に限定し、実施。日々の活動は、機器の点検などに限定した。コロナ禍にあっても防災意識を低下させないよう活動内容を見直す。

職場精神衛生管理委員会

文責／平澤美枝子

◎目的

職員が個々に持つ悩みや不安を解消し、就業意欲が向上するような職場環境を創出する。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：平澤美枝子(リハビリテーション課)
総務課：香取文男
相談・連携課：石田康之
介護課：丸山　恵、鈴木厚祐、高橋麻莉菜
看護課：小川ひろ子
リハビリテーション課：佐田龍吾

◎開催日

第4金曜日、午後0時30分

◎活動状況

施設内研修は、感染対策のため、動画研修(確認テスト付き)に切り替え継続した。新型コロナウイルス感染症に対する職員の不安の声があったため、感染対策チームを発足した。職員の定着を図るため、新入職者面談(3・6・12ヵ月目)を継続し、問題点があれば各課長と連携した。今年度は3年毎に行っている職員満足度調査や2017～2020年度コース別研修受講者向けアンケートの集計を行い、取り組みに対する改善点の抽出を試みた。次年度は結果をもとに見直し、職員の精神衛生にさらに寄与したい。

身体拘束検討委員会

文責／長竹靜子

◎目的

利用者の生命または身体の保護のため、一時的な身体拘束の検討と最短期間で解除に向けた対応を検討する。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：長竹靜子(看護課)
総務課：香取文男
相談・連携課：石田康之
介護課：丸山　恵、佐久間絢香、保谷浩一
リハビリテーション課：依田香保、森本未来

◎開催日

第2火曜日、午後1時

◎活動状況

今年度も拘束(ミトン着用者)は1名のみであった。コロナ禍となり、御家族と面会できないことによるストレスで上衣類のボタンを外すなど、以前は見られなかった行動が多々見られるようになった。ベッド上で過ごされることが多くなり、胃瘻自己抜去の危険性が見られたことから、ミトン解除までは至らなかった。今後は、少しずつ離床時間を設け、ミトンを解除する方向で取り組みたい。

褥瘡改善委員会

文責／宮内美子

◎目的

褥瘡予防、発生減少を目指す。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：宮内美子(看護課)
相談・連携課：岡田大輔
介護課：丸山　恵、鈴木厚佑、中山陽介、前田美香
リハビリテーション課：平澤美枝子、金子正樹、田代　舞
栄養課：細島ひさゑ

◎開催日

第1水曜日、午後0時30分

◎活動状況

利用者の褥瘡ケア計画書は3月に1回作成。令和2年度の褥瘡発生は10名、うち複数個所の発生が2名。治癒に要した期間は平均2週間であった。佐倉厚生園病院褥瘡委員会主催の勉強会に1名参加。本年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、活動性が低下しがちであった。今後はそれらを踏まえた上で、褥瘡発生を防止できるよう工夫したい。

排泄検討委員会

文責／保谷浩一

◎目的

排泄状況の改善を目指す。

◎メンバー（2021.3現在）

委員長：保谷浩一(介護課)
総務課：香取文男
介護課：丸山　恵
看護課：坂本悦子、長竹靜子
リハビリテーション課：依田香保

◎開催日

第4火曜日、午後1時

◎活動状況

介護度の重度化が進むなか、排泄介助に際しては利用者・介助者の心身への負担軽減が求められる。衛生面・生活の質の向上を目標に、リハビリテーション課と連携を取りながら、可能な利用者に対してはオムツからトイレ排泄への移行に取り組んだ。便性状が緩く漏れの多い利用者に対しては、服薬調整等を行い、漏れの改善を図った。今後も各課と協力し、トイレ排泄移行に取り組みたい。

4 活動報告

1.入所利用者の認知機能(HDS-R値)の変化

入所利用者に対し、改訂長谷川式簡易知能スケール(以下HDS-R)を実施し、認知機能の評価を継続して行った(図3)。2016年度から2020年度の5年間分の入所時、3か月後、6か月後の平均値を比較したところ、入所後3ヶ月目の値は若干上昇する傾向がみられていたが、2020年度は1点以上の低下がみられた。2020年度の値について、現時点では利用期間が短く確実な数値ではないが、約1年に及ぶ面会制限や活動の自粛が入所利用者の認知機能面に影響したと考えられる。また面会方法、ボランティア等による活動に替わる何か他の活動の検討が必要であると思われた。

2.健康と喫食量との関係

入所利用者108人中、経管栄養者を除く90人について各人の毎食喫食量を記録した。残食傾向を例年と同様に完食型、減食型、二極型、モザイク型の4型に分類してその分布をみると、第1型59人、第4型14人、第3型13人、第2型4人であった。完食型の場合、体調が良好である利用者が多かった。第4型では食嗜好や認知機能、覚醒の状況、精神面の状況などが喫食時に影響した。第3型では体調不良など身体の不調や精神面の状況、第2型では食思不振などが見受けられた。喫食率を上げるため、栄養を確保する取組みとして、利用者に寄り添いながら多職種が連携し、食事の提供および日常生活に多角的に介入する取組みが大切である。

3.生活リズムの改善による健康維持の試み

入所利用者108人中、入所期間中に降圧剤、下剤、眠剤、抗精神薬が不要となった利用者のHDS-R値を調査した。入所時HDS-R値と最終日HDS-R値を比較できた92名について報告する。向上群33名、低下群41名、不変群18名について分析したところ、降圧剤が不要となったのは8名で、向上群は3名(9%)、低下群は4名(9.7%)、不変群は1名(2.5%)であった。下剤について、不要になったのは低下群1名(2.4%)であった。

施設の中で排泄、特に排便管理は重要な取り組みである。下剤が新たに処方された26名については、向上群9名(27.3%)、低下群11名(26.8%)、不変群6名(33.3%)であった。不変群は介助を要する者が多く、体調の安定には排便の管理が欠かせないことが示唆された。

眠剤が不要となったのは8名で、向上群2名(6.1%)、低下群5名(12.2%)、不変群1名(5.5%)であった。うち新たに薬が処方された者は低下群1名(2.4%)のみであった。環境が身体に与える影響が強く現れる低下群において、夜間の睡眠が守られたと示唆された。

抗精神薬が不要になったのは9名で、向上群5名(15.1%)、低下群3名(16.7%)、不変群1名(5.5%)であった。うち新たに処方された者は低下群2名(11.1%)であった。寄り添いなど、安心感のある環境は内服薬の削減につながることが示唆された。

4.施設内研修

老健職員として全般的な技術向上を目指し、施設内研修内容の改善を図った。感染症流行により外部研修は困難となったが、対策として動画研修を多く取り入れた。さらに確認テストを行い、充実を図った。感染対策として、今年度は特に実技演習を繰り返し行い、新型コロナウイルス感染症の万が一の発生に備えた。

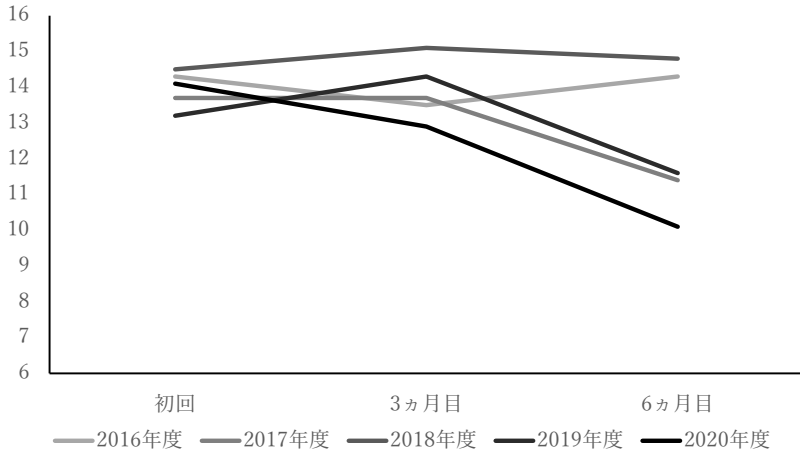


図3　入所利用者のHDS-R値の変化

5.高齢者に適するおやつの提供

米屋株式会社研究開発副統括兼事業開発室長 白鳥正俊氏と共同で開発した「高齢者に適する水羊羹」を、昨年度に引き続き提供し好評を得た。中秋の名月に因み、9月30日は67人の入所利用者（経管栄養対象者12人を除く）に提供。お月見に因んだ音楽やポスター、ススキ、団子などを飾り秋の夜を演出した。また水羊羹の提供に対しアンケートを実施。「また食べたいか」という設問に対し、「食べたい」が62人（92.5％）、「食べたくない」が1人（1.5％）。「返答無し」が3名（4.5％）であった。今後も利用者のより一層豊かな食を目指し、この取り組みを継続していきたい。なお関係者準備検討会は計6回開催した。

5 関連施設

厚生園ケアマネジメントセンター

文責／高橋隆彦

スタッフ(2021.3現在)

介護支援専門員：常勤3名
高橋隆彦(管理者)、内藤順江、成毛育子

活動報告

2020年度の目標は「佐倉厚生園病院の理念に基づき、安心できる在宅生活を支援する」としていた。

1.ケアマネジメントの質の向上については内部・外部の研修に参加し、スキルアップを図った。また法令遵守を意識し、月例会や随時事例検討等を行った。
2.感染症対策を講じた上、佐倉市内の地域包括支援センターとの研修会等に参加し、連携の強化を図るとともに情報交換を行った。また社会資源等の情報を整理し有効活用した。退院・退所後の在宅生活をスムーズに行えるよう相談員等との連携を図り、利用者が安心して在宅に復帰できるよう基盤作りに努めた。
3.新設の施設見学や勉強会に参加することで情報収集をすると同時に、各事業者と密に連携を取ることでより良い関係作りに努めた。
4.職員間でコミュニケーションを密にし、情報の共有化を図った。
5.連携を強化し、グループの活性化を図ることにより、収益の改善に努めた。
6.学会・研修会への参加

・高橋隆彦：佐倉南部地域包括支援センター「佐倉・南部地域合同勉強会」2020.9.18
佐倉南部地域包括支援センター「佐倉南部地域医療介護連携の会コロナ禍における退院支援」2020.12.1
佐倉市高齢者福祉課「コロナ禍における退院支援アンケート結果より」2021.2.18
株式会社オーケーサービス「2021年度介護報酬改訂のポイント」2021.3.12
千葉県介護支援専門員協議会「2020年度主任介護支援専門員研修」
2020.11.17、11.18、11.27、12.5、12.13、12.20、2021.1.9、1.26、2.7、2.13、3.1、3.8
・内藤順江：佐倉白翠園ケアサービス・生活クラブ風の村ケアプランセンターさくら「合同事例検討会」2021.3.8

今後の目標

佐倉厚生園病院の理念に基づき、安心できる在宅生活を支援する。

1.ケアマネジメントの質の向上
①外部研修会等に積極的に参加し、知識・技術を磨く。
②法令を遵守し、法改正に柔軟に対応できるよう努める。
③職員間の活発な意見交換を行い、より良いケアマネジメントに繋げる。

2.地域包括ケアシステムへの参加
①各事業所と情報交換し、事業所間の繋がりを作り、深める。
②地域包括支援センター・医療連携室との交流・情報交換等を強化する。
③行政や民生委員との連携を強化する。
④中重度の要介護者や認知症高齢者への対応の更なる強化を図る。
⑤各事業者と密に連携を取ることによって、収益の改善を図る。